作品性、展示空間、観者を意識化させることが、ダニエル・ヒューレンの《分裂小屋》シリーズである。

中村 泰士

ダニエル・ヒューレンの《分裂小屋》シリーズ（Churchill Gallery, 1987年）は、原型を持った作品として、それまでの彼のストライプによるサイト・スペシフィックな作品に代わって、一九八〇年代中頃から登場した。この作品は、建築家が建築を構築する際に、幾何学的な形状を用いて、空間を機能的に区画するという考え方に基づいています。この考え方では、空間そのものが作品として存在し、観者がその作品と対話し、それがどのように機能するかを理解する仕組みを構成するものとしています。

この作品は、建築の表現手法を用いて、展示空間を再構築する試みです。ヒューレンは、既存の展示空間を破壊し、新たに構築された空間を観者に提供することで、新たな展示空間の可能性を追求しています。

展示空間の構築において、ヒューレンは、作品と観者との関係を新たな視点から捉えています。彼の作品は、観者が作品と対話し、その作品がどのように機能するかを理解する仕組みを構成することが特徴です。この観点から、ヒューレンの作品は、展示空間の再構築にむけて、新たな表現手法を試みていると言えます。

ヒューレンの作品は、展示空間の再構築にむけて、新たな表現手法を試みていると言えます。彼の作品は、観者が作品と対話し、その作品がどのように機能するかを理解する仕組みを構成することが特徴です。この観点から、ヒューレンの作品は、展示空間の再構築にむけて、新たな表現手法を試みていると言えます。